

INTERVIEW

シティ・タワー診療所 管理者
島崎亮司先生



「寄り添う医療」と「地域との連携」を 土台に、断らない在宅医療を実現。

聞き手：山田隆司 地域医療研究所長

地元に近い田舎を探して赴任

山田隆司(聞き手) 今日は、岐阜市 シティ・タワー診療所に島崎亮司先生をお訪ねしました。

この診療所の立ち上げのときには、いろいろな事情があって外部の医療法人に運営をお願いした時期があり、その後協会が事業主となって立て直し、4代目所長として島崎先生に着任していただきました。先生に真剣に取り組んでいただいて、今では協会の診療所の代表格になっています。そのような経緯もあって、今日はお話を伺いたいと考えました。

まず、先生のご経歴を簡単に紹介していただけますか。

島崎亮司 私は2003年に和歌山県立医科大学を卒業

し、信州大学の医局に入局して2年間内科の研修をしました。その後一般の市中病院に1年間勤務しましたが、当時から総合診療的なことをしたいと思っていたので、2006年から岐阜県の高山市に行くことになりました。

山田 どういう経緯で高山へ行くことになったのですか。

島崎 地元に近いところで田舎がないかなと思って、実は地図を見て探して、たまたま見つけました(笑)。それで高山市役所へ電話をかけたのです。高山市は広いので、診療所もたくさんあると言われました。6年間高山市にお世話になりました。最初の1年は久々野診療所、その後

5年間高根診療所へ行きました。

山田 先生が行った当時、高根地区の人口はどのくらいだったのですか。

島崎 500人ぐらいでしたね。

山田 高根は岐阜県のへき地と言われるところの中でも特に厳しい地域です。交通は不便だし、冬の寒さは厳しいし、高根での生活は大変ではありませんでしたか。

島崎 今思うと過酷でしたね。冬場はマイナス20℃になりますし、医師住宅はオンボロだったし、でも1年やった頃からどんどん面白くなっていました。住民の皆さんと親しくなってその方の背景も分かるようになり、ただ高血圧の薬を出すだけでなく、背景を考えて治療をする。「こういう医療は面白い」と思うようになりました。

田舎での経験は都会でも活かせる

山田 高根診療所は5年で出るようになったわけですね。その時に先生にお会いしてお話を伺いました。どういうきっかけで先生は協会を知ったのですか。

島崎 揖斐郡北西部地域医療センターにいらっしやった吉村学先生との出会いがありました。協会が開催している地域の勉強会に参加する機会があって、当時私はオムツフィッターの資格をとったのでその発表をしたのですが、そのことを吉村先生が認めてくださいました。それから吉村先生との交流ができ、勉強会も行き来したりして、いろいろご指導いただきました。

山田 そうだったのですね。吉村先生も自治医科大学の卒業生ではないのに、大学時代から地域医療に関心を持って自治医大地域医療学のレジデントになって、その後、岐阜にきて本格的に地域医療に飛び込んだ。自治医大の卒業生は、義務ということで最初は地域医療に抵抗感がある人も少なくないのですが、吉村先生や島崎先生は自分からあえて地域に飛び込んでこられたので、きっと目指すものを共有できたのですね。

島崎 生い立ちも似たような感じで、総合病院があるのは100km先というような田舎育ちです。

山田 吉村先生も携帯電話の電波が届かないような地域で生まれ育ったと話していましたね。

それで縁あって協会に入らせていただくことになり、私としてはとてもありがたかったわけですが、先生には岐阜県ではなく、滋賀県の当時の近江町の診療所に行っていたことになりました。近江診療所はいかがでしたか。

島崎 近江は高根とは全く違いました。外来の人数ももちろん多かったです。高根では在宅患者さんは10人くらいだったのに、近江では70人という数で驚きました。近江も田舎ではあるけれど、訪問看護ステーションや薬局なども多く、近江にいた1年間で「連携」を学ぶことができたと思っています。今シティ・タワー診療所で作っている仕組みは近江診療所で学んだものと言えます。

山田 高根のように本当にへき地でリソースが限られているところだと、自分だけでやらなくてはならないけれど、近江では協力してもらえり